

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：14401
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2017～2019
 課題番号：17K02884
 研究課題名(和文) 日本のロシア語教育のための内容重視型授業のデザイン：第2言語習得過程をふまえて

研究課題名(英文) CBI and CLIL for Russian as a foreign language education in Japan: Curriculum development, teacher learning, and SLA for learners

研究代表者
 横井 幸子 (Yokoi, Sachiko)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：70635119

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本の高校のロシア語教育の文脈にあった内容重視型のロシア語教育モデルを構築することを目標として研究を行なった。まず、1)新学習指導要領が標榜する「主体的、対話的で深い学び」のロシア語の授業における具体的な形、2)内容重視型授業と学習者の第2言語習得過程の相関性について、授業実践とその学習効果の検証を重ねた。日露交流プログラム内容に直結した教科書や教材を開発することで、通常のロシア語の授業と連動させた交流学习が可能になった。その結果、到達目標レベル(CEFR-A1, A2など)で想定されている話題や内容を教科書を使って教室で学び、交流活動で実際に使うという学習過程が実現した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
 高校が展開している日露交流プログラムに直結した教科書や教材を開発することで、普段のロシア語の授業と日露交流プログラムを連動させた学習機会を確保でき、高校生たちが通常到達目標とするレベル(CEFR-A1, A2など)で想定されている話題や内容を教科書を使って教室で学び、交流プログラムで実際に使うことができるようになった。

研究成果の概要(英文)：This 2-year-long qualitative study explored how content-based instruction (CBI) may be employed to better promote Russian as a second foreign language learning in Japanese high schools. Our qualitative investigation reveals that CBI-inspired, collaborative learning programs for Japanese learners of Russian and Russian learners of Japanese often created authentic learning spaces where both the Japanese and Russian learners could explore languages and cultures through dialogue. In addition, our CAF analysis shows that dialogue and collaboration may promote second language acquisition. In fact, compared to their individual work, the learners produced more complex and accurate texts when they collaboratively worked together in groups.

研究分野：外国語教育

キーワード：外国語教育 ロシア語教育 内容重視型の言語教育

1. 研究開始当初の背景

ことばは、単なる伝達機能だけではなく、思考を媒介しながら思考そのものを深め展開し、構築していく重要な機能も持っている(e.g., Vygotsky, 1968)。このような、人間の知的活動に不可欠なことばの機能を、第2言語習得理論研究の第一人者 Merrill Swain は *linguaging* (e.g., Swain, 2006) と呼び、第2言語学習に欠かせない要素であると指摘している。つまり、ことばを使って主体的に思考することを促すような内容を扱う言語活動をもっと言語教育の中で実現していく必要があるということである。しかし、日本の外国語教育、特に初/中級レベルでは、前者の伝達機能の習得ばかりに終始していないだろうか。初級学習者には、思考の展開を伴うような内容を語学の授業で取り上げることは不可能なのだろうか。

最近では日本でも、英語教育を中心にことばそのものを学習対象にするのではなく、“ことばを使って何かを学ぶ、”内容重視型の第二言語教育アプローチが注目されるようになってきた。1980年代から北米のイマージョンスクールを中心に開発されてきた Content-based instruction (CBI) や、ヨーロッパの複言語主義政策を背景に1990年代からヨーロッパで発展してきた Content and language integrated learning (CLIL) の2つがよく知られているが、どちらも言語面と内容面を統合して扱い、“内容学習を通じて言語を学ぶ”ことに主眼を置いている。English for specific purposes などに代表されるように、特定の分野内容を語学教育で取り上げる取り組みはこれまでも見られたが、それらは上級レベルでの実施が殆どであった。一方で、内容重視型の語学教育アプローチは、語彙や表現、文法項目の暗記や繰り返しといった所謂低次の思考活動にとどまらず、内容の比較や分析といったより高次の思考を伴う知的活動をごく初級のレベルから導入することを提唱しており、初/中級レベルにとどまることの多い日本のロシア語教育での実施に大いに期待が寄せられるところである。

CBI や CLIL の具体的な実践については、欧米のイマージョン、英語圏で英語を第二言語として学ぶ ESL、目標言語圏外で目標言語を外国語として学ぶ外国語教育 (FL) など、多様な言語プログラムでの取り組みと成功例が多く報告されている。日本でも、1990年代から日本語教育の分野で CBI を使った取り組みが報告されているが (e.g., 岡崎 1994)、最近では英語教育の分野でも、上智大学を中心に CLIL が積極的に導入されてきており、それに伴って日本の外国語教育における実践報告も散見されるようになった (e.g., 渡部, 池田&和泉, 2011)。一方で、それ意外の外国語教育における取り組みについては殆ど報告されていない。特に、日本におけるロシア語教育は、早くても高校、通常は大学に入学してから初めて学ぶ学習者が殆どで、授業時間数も十分に確保できないために、上級レベルにまでなかなか達することができないという事情を抱えている。

2. 研究の目的

本研究は、日本のロシア語教育の文脈にあった内容重視型のロシア語教育モデルを構築することを目的とした。

- 1) どのような内容 (= テーマ) と言語学習項目を導入して、学習者に高次の思考を促すようなロシア語学習をデザインすることができるのか
- 2) 内容重視型授業を通じて、学習者の第2言語習得がどのように進むのか
- 3) 日本のロシア語教育の文脈を考慮した内容重視型のロシア語教育モデルの構築

3. 研究の方法

本研究は、日本のロシア語教育に適した内容重視型の授業モデルを開発するにあたって、以下の3段階のプロセスを経て実施していくこととした：

1) 欧米のCBIやCLIL等内容重視型言語教育アプローチの実践状況を調査し、日本のロシア語教育への具体的な文脈化を検討する

CBI(Content-Based Instruction)やCLIL(Content and Language Integrated Learning)といった、最近欧米で成功例が報告されているカリキュラム開発/指導のアプローチを検討し、日本のロシア語教育への文脈化を検討した。

2) 日本の文脈にあった内容重視型のロシア語授業のモデルを開発する

ロシア語科目を開講している高校や、高大接続の取り組みに関わってきた大学教員の中から開発チームメンバーを募り、開発チームを結成した。次に、各チームメンバーが自分の授業で実施可能な内容重視型授業の単元案を協働で作成し、実際に実施した。授業を検証の上、単元案を再検討し、授業モデルを開発した。

3) 内容重視型授業を通じて、学習者の第2言語習得がどのように進むのか検証する

内容重視型の授業と学習者の第2言語習得過程の関わりについては、主に質的分析とCAF分析によって検証した。

質的分析：エスノグラフィ分析と談話分析

- 授業やインタビューで録音したデータを文字化する
- 文字化したインタビューや授業のやり取りを Miles & Huberman (1994) にしたがって、所謂「内容分析」を行う。まず叙述コードを使って一文毎に内容をコード化し、続いてより抽象的なコードを用いて複数回にわたってコード化の作業を行った。
- 上記の内容分析結果をもとにして、Bucholtz & Hall(2008)等に従い、授業中のやり取りを詳細に談話分析した。

CAF分析

Larson-Freeman (2009)らに従い、学習者言語のCAF分析を行い、学習者の第2言語能力を複雑さ(Complexity)、正確さ(Accuracy)、流暢さ(Fluency)から分析する。分析対象とするのは、授業中の学習者の発話、発表テキスト、課題等である。

4. 研究成果

本プロジェクトは、グローバル化に対応した多言語教育の一環として「ロシア語を用いて主体的に思考し、判断し、表現できる人材の育成」を目指し、1)新学習指導要領が目指すところの「主体的、対話的で深い学び」のロシア語の授業における具体的な形、2)内容重視型授業と学習者の第2言語習得過程の相関性について、授業実践とその学習効果の検証を重ねた。

1)「主体的、対話的で深い学び」のロシア語の授業における具体的な形とは？

高校の文脈に沿った教科書を開発するにあたり、これまで「課外活動化」していた地域・日露交流プログラムを授業の学びに直接つなぐことが可能であることを示すことができた。まず、以下のような日露交流プログラムを開発した。

日露交流プログラム

【第1期】オンライン交流（受け入れ前）

- a) 日露がそれぞれ、自己紹介シートを日露両言語で作成する
- b) 日露で自己紹介シートを交換し、教師はそれを参考にしてペアの割り振りをする
- c) 日露各々の授業で、自己紹介シートを活用する(e.g., 自己・他己紹介の練習など)
- d) 日露ペア同士、学習言語で手紙を書く

e) 互いの学習している様子や、その日の生活の様子を写した写真などを共有する

f) ペアの相手に、「小さな贈り物」を準備し、手紙を添えて送り合う

【第2期】ロシア人学習者受け入れプログラム（3月）

約10日間のプログラムで、ロシアから10名の日本語学習者を受け入れる。これらの日本語学習者は、それぞれ第1期でペアになった日本人生徒のところにホームステイし、ステイ先で用意してくれるお弁当を持って毎日登校する。受け入れ側の高校では、ロシア語や英語、国語の授業に加えて、数学や物理学など理数系の授業も英語・ロシア語で受けられるように事前に準備する。その他、部活動への参加や市内観光やコンサートなどのイベントにも参加。

【第3期】ロシア短期研修派遣プログラム（9月）

第2期での受け入れプログラムと同様、今度は日本の高校生10名がロシアでの約8日間の海外研修に参加する。ペアになっているロシア人宅にホームステイしながら、現地の学校にて授業を受ける。また、課外活動にも参加する。

上記の交流プログラムの流れに概ね沿って、教科書の内容を構成することとし、作成に取りかかった。教科書では、第1期のオンライン交流と第2期のロシア人学習者の受け入れプログラムの内容を取り上げることにした。各章の構成は下記の通りである：

自分のプロフィールを書く

第1課 文字と発音

第2課 Кто я? 「私」はどんな人ですか。自由に思い描いてみましょう。

第3課 Э то моя семья! 自分の身近な人のことを紹介しましょう。

第4課 Интересы, хобби...好きなもの、好きなことについてロシアの友人と語りましょう。

第5課 Дóма あなたの家に来てくれたロシアの友人に家を案内しましょう。

第6課 Мой завтрак ロシアの友人と朝ごはんを紹介し合いましょう。

第7課 Мой день ロシアの友人と1日のスケジュールについて話し合いましょう。

第8課 Наша школа СМТ 学校ではあなたがガイド役です！ロシア語で学校を案内しましょう。

第9課 Мой город – Саппоро и Новосибирск 自分たちの町を案内しましょう。

第10課 Подáрок あなたはロシアの友人にどんな贈り物を用意しますか？なぜですか？

第11課 Плáны на бу дущее... 10年後の自分について、ロシアの友人と熱く語りましょう。

第12課 Письмó ロシアの友人やホストファミリーに手紙を書きましょう。

本書の作成にあたっては、特に学習者の「主体的、対話的で深い学び」の具現化を目指した。まず、話す内容について学習者自らが主体性を発揮し、学ぶ事柄に対して自らと何らかの関わりを見出して思考を働かせるように、相手に伝えたい事柄について日本語を使ったり、絵を描いたりして深く考える活動を随所に盛り込んだ。例えば、2課ではごく簡単なロシア語で「自分」について語ることを目標にしているが、初めに日本語で自分のアイデンティティについて問い、掘り下げて、相手に伝える内容を深めるという活動を行うことにした。自分自身は誰なのか、何が好きなのか、なぜロシア語を学んでいるのか、それぞれ自問し、相手に伝えたい内容を絵に描いてイメージした上でロシアの友人に（例えば）«я – пианист.»と伝える。このような深い自己認識を伴うオーセンティックなやりとりと相互理解が学習言語を使って行われる時に、学びの過程に対話性を兼ね備えた学習者の主体性や深い学び、すなわちより「本質的な学び」が起こるのである。

このようにして、地域・日露間の交流が定期的にあるという高校の事情にあった、通常の

授業でも教科書として使えるような教材を開発することで、これまで「課外活動化」していた交流プログラムを軸とした授業を展開することができるようになった。

2) 内容重視型授業と学習者の第 2 言語習得過程の相関性について

日露交流を軸とする内容重視型のロシア語学習プログラムとロシア語習得の相関性を検証した。最近の第 2 言語習得理論 (SLA) 研究の成果より、学習者言語を複雑さ (complexity), 正確さ (accuracy), 流暢さ (Fluency) から評価する CAF 分析が開発され、より多角的に言語習得過程を理解することができるようになった [e.g., Ellis & Barkhuizen 2005, Larsen-Freeman 2009]。本研究では、日露交流プログラムの一環で生徒たちが自分たちの町についてロシア語で実際にプレゼンテーションをした際の彼らの学習者言語を、CAF 分析を用いて多角的に分析した。その結果、生徒たちの学習者言語は、総じて文法的に正確で、ポーズも平均して 1 分間に 1 度以下しか起きていないことから、流暢さも確保されていること、一方で語彙的、形態的、統語的に複雑な表現の使用は多くなかったことが明らかになった。すなわち、できるだけ平易なロシア語で、正確に流暢に話していたということである。

プロジェクト型授業では、従来型の教室内で完結する教科書中心の授業とは異なり、ロシア語習得そのものを目的とはしておらず、何か「より上位の活動」(A. A. Леонтьев 1974, 横井 & 林田 2013:57-59 も参照) を遂行するために必要となるロシア語を使ったことば活動が組み込まれる。つまり、プロジェクト型授業におけることばの学びとは、「より上位の活動」を遂行するために必要となるロシア語の知識と技能を、実際にロシア語を使う経験を重ねながら習得していく有機的な学習プロセスであり、ロシア語の文法項目や語彙を一つ一つ順番にブロックを積み上げるように構築していくような体系的なプロセスではない。単なるパターンプラクティスや暗記ではなく、現実の具体的なコンテキストの中で実際にロシア語を使い、社会とつながっていくことで、より「深い学び」がもたらされるのである。

引用文献

- Bucholtz, M., & Hall, K. (2008). All of the above: New coalitions in sociocultural linguistics. *Journal of Sociolinguistics*, 12(4), 401–431.
- Ellis, R. & Barkhuizen, G. 2005. *Analysing learner language*. Oxford University Press.
- Larsen-Freeman, D. 2009. Adjusting expectations: The study of complexity, accuracy, and fluency in second language acquisition. *Applied linguistics*, 30(4), 579-589.
- Леонтьев, А. А. (1974). Речевая деятельность // Основы теории речевой деятельности. М. (米重文樹他訳「言語活動」『現代ソビエト心理言語学』第 2 章, 明治図書).
- Miles, M. B. & Huberman, A. M. (1994). *Qualitative data analysis* (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.
- 横井幸子 & 林田理恵 (2013). 「内容を重視した外国語教育のカリキュラム開発と指導について —第 2 外国語としてのロシア語教育の場合—」『ロシア語教育研究』第 4 号, pp. 57-73.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 横井幸子	4. 巻 9
2. 論文標題 日本の高校のプロジェクト型授業における第2言語習得とその評価について：客観的評価（ ）とCAF分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ロシア語教育研究	6. 最初と最後の頁 89-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 永沼栄理子 & 横井幸子
2. 発表標題 地域貢献を明確に目的とした「社会に開かれた」ロシア語教育：東京都渋谷区における実践
3. 学会等名 外国語教育シンポジウム，日本外国語教育推進機構(JACTFL)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 遠藤雅公，永沼栄理子，依田幸子，横井幸子
2. 発表標題 「社会に開かれた」ロシア語教育とは？
3. 学会等名 日本ロシア語教育研究会 年次集会，上智大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 横井幸子
2. 発表標題 日本の高校のプロジェクト型授業における「学び」の評価とロシア語習得について：客観的評価(TRKI)とCAF分析について
3. 学会等名 JACTFL第6回外国語教育シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Sachiko Yokoi Horii	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 262(19)
3. 書名 A. Mustajoki, E. Protassova, M. Yelenevskaya (Eds.), The Soft Power of the Russian Language: Pluricentricity, Politics and Policies (pp. 245-256)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----